

ロシアの船旅

岡本祥一 予科5-7
(川口市) 航空通信16-4

サンクトペテルブルグ

「ロシアの大河 ボルガの船旅」に参加した。若かりし頃、シャリアピンの「ボルガの舟歌」に感激、いつの日かボルガ川を旅したいと思っていた。

サンクトペテルブルグ（レニングラード）で2泊後乗船、ネヴァ川からボルガ川を経て、モスクワまで約1,300Kmを7日かけて遡行、モスクワで1泊後帰国する計画であった。航路の概要を第1図に示す。

平成29年9月末、成田空港12時、アエロフロート便で出発、モスクワ乗り継ぎ、サンクトペテルブルグへ。ホテル着は22時（現地時間）。体内時計は真夜中の4時、時差は6時間である。ベッドに倒れこむ。

観光第1日、15名ほどの団体で行動。午前はネヴァ川クルーズ、水面から市街を訪れる趣向である。



第1図 ボルガの船旅航路図

1703年、ピョートル大帝（在位168

2-1725）はネヴァ川河口に新都市の建設を命じ、サンクトペテルブルグと命名した。建設に当たり建物の高さを5階までと制限した。そのため市の中心部では教会を除き、建物すべてが現在に至っても一定の高さとなっており、実に整然とした印象を与える。一例としてエルミタージュ美術館を含む建物群を第2図に示す。このような景観は大都市としては珍しいのではないか。



第2図 ネヴァ川からエルミタージュ美術館の建物群を望む

1917年10月、ネヴァ川に停泊中の巡洋艦オーロラ号が放った1発の号砲、兵士、農民による共産革命開始の合図であった。そして今は2017年10月、満百年目の催しはないのだろうか。ロシア人ガイド数人に質問したが、まともな回答は得られなかった。彼らにとり迷惑な質問であったのだろうか。1991年の社会主義社会崩壊から四半世紀、世界を揺るがした事件に意外と無関心のように思われた。朝日新聞（H.29年11月4日、13版7頁）にも同じ趣旨の記事が掲載されており、ロシア全体で革命100年を祝う雰囲気乏しいことは確かなようである。

エルミタージュ美術館

昼食後は世界三大美術館の一つであるエルミタージュ美術館を見学した。“エルミタージュ”とはフランス語で「隠れ家」を意味するとのこと。収蔵美術品は

約300万点、展示室を全て巡ると20km以上に及ぶという。1764年エカチェリーナ2世（在位1762-96年）が当時冬宮として用いられていたエルミタージュに皇室の美術収集品を置いたことに始まり、さらに歴代皇帝により一層の充実が図られてきた歴史がある。ソビエト時代は資産家からの没収品を収納していたと聞いている。

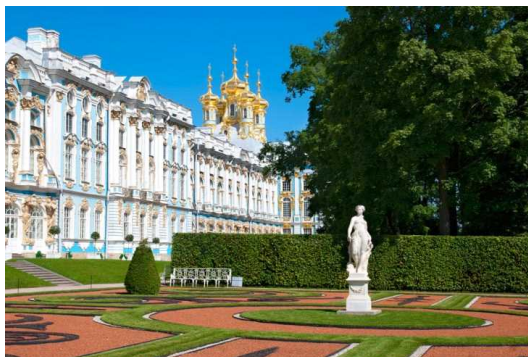
ガイドに導かれて、それを僅か約3時間で見て回った。一言でいえば豪華絢爛、尽きせぬ魅力がある。豊かな天然資源に恵まれている大国ロシアの一面が見て取れる。有名な絵画や展示品の前はすごい人ばかりで、カメラを構える余裕もなく、ただ人ごみの中を歩いただけの印象が強い。

サンクトベルグ観光第2日、午前是世界で4番目に大きいといわれる「聖イサク大聖堂」（1858年建立）、「血の上の救世主教会」（1907年建立）を外側から眺めた。「血の上の・・・」は穏やかでない。ここで1881年に皇帝アレクサンドラ2世が暗殺され、その上に建てられたとの説明であった。

エカチェリーナ宮殿

午後は市内から25Km 南東の「夏の宮殿」と言われる「エカチェリーナ宮殿」に向かう。途中半ばあたりで、第二次世界大戦のレニングラード（現在のサンクトテルブルグ）包囲戦の際、ドイツ軍がこのあたりまで進出してきたとの説明があった。ドイツ軍の撤退の際、エカチェリーナ宮殿の宝物は全て持ち去られ、有名な「琥珀の間」の大量の琥珀もすべて略奪されて失われたといわれている。宮殿出口の壁に1枚の写真が貼られていた。ドイツ軍撤退の後焼け焦げた壁だけが残された建物の惨状が記録されていた。荒廃した建物は内部の宝物を含めて1979年から開始された復元作業により、2003年に完全に元の姿に改修された。

この宮殿は、ロマノフ王朝復興の祖ピョートル大帝（在位：1682-1725年）が妻のエカチェリーナ1世（在位：1725-1727年）のために夏の避暑地として造らせたものである。当初は石造りの地味な宮殿であった。



第3図 エカチェリーナ宮殿

ピョートル大帝と皇后のエカチェリーナ1世の間に生まれた娘、エリザベータが第6代ロシア皇帝（在位：1741-1762年）に即位した。その際、「壮麗かつ壮大なバロック様式に改築するように」と命じ、4年の歳月を費やして、金箔を随所にあしらった全長350mと現在の規模に近い壮麗な宮殿が完成した。代を経てエカチェリーナ2世は琥珀を壁一面に飾り立てた「琥珀の間」を追加整備し、1770年に完成している。

エカチェリーナ宮殿見学に際しては船頭の大黒屋光太夫（1751-1828年）の話がある。1782年三重から江戸に向かう途中嵐に会い、7か月漂流後アリューシャン列島のアムチェトカ島に漂着、帰国の許可を求めてカムチャッカからイルクーツクを経てサンクトペテルブルグまで1万数千Kmの荒野を走破、「謁見の間」で女帝エカチェリーナ2世に帰国を懇願、許されて1792年根室に帰着した。日露外交の第一歩をしるした歴史の一齣である。約230年の昔、苦難に耐え抜き生還した大黒屋の強い生命力に感心しながら部屋を後にした。

ラフマニノフ号

サンクトペテルブルグの観光を終えて夕方乗船、乗客定員250名のところ団体貸し切りで約100名、乗務員100名を乗せた8,000トンのクルーズ船が静かに埠頭を離れた。部屋は最上階の4階にとってある。エンジンの振動はほとんど感じない。モスクワまでは約1300Km、高低差120mを19か所の水門により遡る行程である。



第4図ラフマニノフ号

最初の夕食は船長主催の歓迎会。発泡酒で乾杯。ロシア料理はあまり経験がない。かなり大まかで食が進まなかった。

船はネヴァ川を遡行、ヨーロッパ最大と言われるラドガ湖に入り、岸边沿いに進む。沿岸は全く人気のない森林地帯が果てしなく続く。ロシアは広い。最初の水門で10mほど上昇、寄港地「マンドロギー」入港、下船して付近を散歩する。気温は大体10度、広い台地の森は眩いほどの黄色に包まれており、ところどころに紅葉した「ナナカマド」の赤い実が強く印象に残っている。

海洋を航海する10万トン前後の客船とは異なり、このクルーズ船には余暇を楽しむ設備が全くない。やむを得ず室内に籠る事態を招く。備え付けのテレビは画面も悪く、ロシア語での放送は全く理解できない。完全に社会とは断絶した環境に置かれることになる。主催者側も心得ているらしく、お茶会、歌会、簡単なロシア語講座など気配りに努めていた。

ロシアの歴史

ロシアの歴史についての話は興味深いものであった。国土は広大な森と平坦なステップそして緩やかな流れの河川に恵まれている。モスクワの北西にあるバルダイ丘陵から黒海にそそぐドニエプル川は紀元前から交易路として機能しており、その沿岸にいくつかの商業都市が生まれ、それが9世紀後半にロシア最古の国家（「キエフ・ルーシ」と呼ばれる）の創設につながったというのである。同じバルダイ丘陵に源流を持ちカスピ海にそそぐボルガ川の上流地域でも紀元前の早くから交易に従事する都市がうまれていたという。しかしそれらの全流域にロシアの支配が及んだのは16世紀、イワン4世の時代であった。

古代文明は河川流域で発展したことが知られている。黄河文明は黄河、エジプト文明はナイル川、メソポタミア文明はチグリス、ユウフラテス川、インダス文明はインダス川、それぞれの流域で発展した。ロシア文明もドニエプル川、ボルガ川流域で発展した歴史がある。これらの川は「父なるドニエプル」、「母なるボルガ」と呼ばれ、物を生み育てる父そして母としてロシアでは親しまれている。

「ロシア」という地域名が最初に文献に登場するのは15世紀末、広く用いられるようになったのはイワン4世の時代、16世紀になってからのことである。その後動乱の時期を過ぎて、1613年ミハイル・ロマノフ（在位：1613-45）が帝位につき、1917年10月の共産革命でニコライ2世（在位：1894-1917年）が退位、約300年続いたロマノフ王朝の支配は終わりを告げた。ニコライ2世は皇太子時代に来日、警備の警察官に切り付けられた「大津事件」で負傷、日露戦争では皇帝として指揮した。共産革命成立1年後の1918年、家族と共に銃殺された。

1922年、共産主義者の勝利によりソヴィエト連邦が成立、1991年の社会主義体制崩壊まで約70年続くことになる。

社会主義体制の時代と現在の体制とどちらが良いかとの質問に対するロシア人ガイドの返答は次の様なものであった。

「ソ連時代の評価は個人により大きく異なる。一般的に年齢が高いとソ連時代を良いとする傾向があり、それに対して現代の若い人達の多くは現代の体制を支持しているのではないか。ソ連時代は医療、学費は無料、学校を卒業すれば就職を世話してくれた。今はそれがない。現在は貧富の差が大きくなった。どちらの体制がよいかは簡単には申し上げにくい。」

ロシア科学アカデミーの共産革命に関する市民への調査でも、回答者の32%が「評価がむづかしい、」29%が「功罪両面」があると答えている。共産革命の是非善悪の判断は複雑な心理が働いているようである。

ボルガ川

ボルガ川を遡行、古都ヤロスラブリに寄港した。12世紀に創設された修道院を見学、17世紀に描かれたフレスコ画が見事であった。小さなコンサートホールで男性4名による聖歌の催しがあり、ロシア人特有の太くて響きのある声での「ボルガの舟歌」は圧巻であった。「ボルガの舟歌」は、その昔ボルガ川を遡行する船を川岸に沿って綱を引いた人たちの労働歌である。船曳はソ連の時代に入り、1929年に禁止された。

帰途、港近くの市場を見学した。特に目立つものは無い。それでも同行の婦人たちは買い物袋をいっぱい膨らませていた。ロシアと言えば「キャビア」を思い出す。品薄のためか極端に高価である。

28.4gr入りの小さな瓶詰めが約1万円以上である。筆者にとって他に土産は無い。清水寺の舞台から飛び込むつもりで手に入れることとした。今は冷蔵庫の中

で出番を待っている。

いくつかの水門を経て、ボルガ川から分かれてモスクワに向かう水路に入る。ボルガ川ともお別れである。



第5図 ボルガノ船曳（絵画）



その分岐点に「母なるボルガ」の塑像がわれわれを見下ろしていた。2度とお目にかかることはあるまい。若かりし頃の夢、ボルガ川よさらば。

第6図「母なるボルガ」塑像

モスクワ

終着点モスクワの埠頭に到着、6泊7日の船旅も終わりである。昼食を済まして「赤の広場」へ向かう。まず「 Gum百貨店」を目指す。ガイドの事前の説明によれば、冗談半分であろうが、Gum百貨店は世界一高価で、世界一大きくて、世界一立派であるという。それがなんと入り口が閉鎖されており、臨時休業である。

サウジアラビアのサルマン国王がロシアを初めて訪問、プーチン大統領と会談後ここに買い物に来るので、閉鎖したということらしい。我が国ではたとえアメリカ大統領が来日して日本橋三越に買い物に来てても臨時休業するなど考えられないであろう。Gum百貨店はソ連崩壊後

の1993年に民営化されている。自主的な休業か、政府の指示なのか。不思議な国である。



第7図 赤の広場
(左の壁がクレムリン、正面が歴史博物館、右の細長い建物はグム百貨店)



第8図 グム百貨店

長い石造りのクレムリンの壁、その中央付近にレーニン廟がある。1924年レーニン死去後、弔問に全国から訪れる人民のため遺体に保存処理を施し、木造の遺体安置所に安置した。1930年に恒常的な施設として現在の花崗岩の施設が造られた。1953年、スターリン死去に際し、その遺体も保存処理が施され、レーニンと並んで安置された。しかし1961年の「第2次スターリン批判」により撤去され、遺体はレーニン廟のそばに移され埋葬された。赤の広場で行われる国家行事に際しては、ソビエト連邦共産党、政府首脳はレーニン廟の雛壇から観閲し

演説するのが慣例となっていた。モスクワ最後の朝、早めに出発、クレムリンにある武器庫と呼ばれる博物館に向かう。武器庫はロシア最古の博物館である。1772年に武器庫の原型となる博物館が建設され、1806年には一般に公開された。



第9図 レーニン廟

1851年、現在の場所に新しい武器庫が建設された。

一階には王冠、宝珠、王笏などのロシア皇帝の収集品、二階には銀器と金細工の容器などの他にイコンをはじめとする宗教に関する品々が陳列されている。いずれの物をとっても逸品ぞろい、見る目を飽きさせない。

所蔵品の一つである福音書を左図に示す。1571年頃に作成されたもので、イワン4世（雷帝）が教会に寄付したものと伝えられている。見事な芸術品である。



武器庫を離れて帰途に就く。



第10図 衛兵の交代

何やら人ばかり、そして管楽器の演奏。土曜日の衛兵交代であった。凛々しい軍服に身を固めた若人の整列、英国バッキンガム宮殿の衛兵交代式を思い出した。

日本では見られない風景である。昼食を済ませて、帰国のためモスクワ飛行場に向かう。

あとがき

短いロシアの旅、印象に残っているものは帝政ロシア歴代の皇帝により集められたおびただしい数の財宝である。国家の基盤となる農奴・農民の影はかけらもみえなかった。しいたげられた民衆の怒りが爆発して1917年に始まる共産革命の成立に結び付いたのではないか。しかし世紀の試みである社会主義社会体制の構築は1991年に破綻、すでに4半世紀をすぎている。今、ロシアの中堅層を構築している人たちは社会体制の激変を経験している。その経験を話してもらいたい、知りたいと思っていたが、結局は小生の突っ込みも足りず曖昧の形で終わってしまった。泥縄ではあるが、ロシアの現在と過去の歴史について今から勉強をしようと思っている。

実は、ロシア訪問はこれで3回目である。1981年（昭和56年）秋、レニングラード大学から1通の手紙が舞い込んできた。1982年2月に「超微粒子の物性」

に関するシンポジウムを行うについて、講演をしてほしい、との依頼状であった。日本からはもう一人、京都大学の教授が招かれていた。旅費は出せないが、滞在中は全てロシア持ちであるとのことであった。このシンポジウムとは別に、正月にかけてロシア旅行の団体旅行募集があり、2月のシンポジウムの事前調査もかねて参加した。レニングラード滞在中に招待主の Berozeruskii 教授に会い、会合の詳細を聞くこととした。規模は、ロシア人の他にドイツのハンブルグ大学 Gunsser 教授ら十数名など200人程度、講演時間は40分、事前に英文の講演要領を送ってほしいとのことであった。

シンポジウムは2月22日から5日間、ちょうど筆者の誕生日の25日の講演であった。シンポジウム終了後、Berozerskii 教授の案内で、Gunsser 教授と3名連れ立ってエルミタージュ美術館に出かけた。その後Berozerskii教授の自宅にまぬかれシンポジウムが無事終わったことを祝い乾杯した。今では懐かしい思い出としてしっかりと頭に刻み込まれている。あれから36年、両教授とも音信は絶え生死は不明である。

{平成29年11月上旬脱稿。}